

信濃地名考

下

				和書門
		二 三 七 九 四	號	類
	一 〇 六	函		
三	冊	架		

庫	文	閣	内	
七 四 函		三 七 九 四	號	和書類
一 七 架	三	冊		

内閣文庫	
番號	和 23794
冊數	3 ( 3 )
函號	174 198



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak 2007 TM: Kodak









月野名垣勢 卷之下編



水内曲橋圖

不動滝

犀河

更級郡  
水熊田口道

手里名長勢 卷之下編



水内新田道

一ツダラ岩



右少缺上若架版者四兩端稍隆似欄基形勢將及南峰實天造也

更級郡八幡 土人撞木橋と云ふりむらじり神

河の方へり半五丈四尺をれり曲りて南へ大橋をまへに長さ十丈

廣一丈四尺欄基のさささ尺橋と水のあひは尋常の水まで五丈

余より碧潭盤渦をふに肝すさす巧通相つて七とせまふ

地理の據にふり氷

倭名鈔大和国檜前和名 比乃久米又ヒノクヒノサキヒ

日本紀矩磨塗万葉 路乃久麻尾と云ふ

乃

乃

乃

雄略紀來目河は修の 來目久米通用あり

●日本紀推古天皇二十年自百濟國有化來者其面身皆斑白若有白

癩中畧仍令構須彌山形及吳橋於南殿時人号其人曰路子工亦名芝

耆磨云野史曰推古帝二十年百濟國歸化人有白癩如紀文又巧掛

長橋令造遺諸國三河國八脛長橋水内曲橋木襲梯遠江國濱名橋會津

閻川橋堦岩猿橋等其外一百八十橋云あはりの夜出處詳ありすと

りとも此橋れりめあ人の多くとそえへはのみちこれたくふと

や造りてめあんとおほ也

高御倉山 名所集往々 信濃とす

長秋詠草 俊 成







按延暦の詔陸奥の蝦夷阿黒磨也也是越の  
蝦夷の魁將也也やらの山の名われをあり

●日本紀持統天皇五年八月遣使者祭信濃國須波水内等神云

按水内等神即戸隱神社也天平年中神帳と劾造とわれん

夫木

あふれ路也風のりありこつせよちるゆみのにり入神かき 家長朝臣

按神名式水内郡風間神社風間村社今八幡と稱一説は野原神社の宇とん或風

を強さふわれを風神と祭る宇ともりの未詳中巻取方條下はるなり

はまのの社出八雲抄未詳

按水内郡妻科村は社あり須波上クニヒト下と稱土人つまの村と傳ひはぬあり此

社と唱ふ妻科とつまのといつてはる屋さはる好まの言ふ似ふ

按三代實錄貞觀二年二月信濃國妻科地神授從五位下同五年妻科神

授從五位上とんあり神名式妻科神社即是也とし妻科の妻れ地

名の傍例あり此神へ階級ありありの我あり倭名抄筑後國上妻下妻乃郡名なりとく妻の地名又多

一本國も今水内はよ妻山安曇よ又社名つまのと其社はぬあり此職者に

る一もとんあり代の社は鹿木造あり角楓ありの我ありん

あふれ神代紀本國も亦三神の中に五十猛神へ五種を萌生一

大屋津姫の家造の幸せありツツツツ楓津姫へ材を守ふあり角楓の我もえへ

れをえ又つまのりの名ありま本集に中勢郎のみこれ家の奇合

檀僧正公朝草ふり野中の表乃つるありあり花すさむれり神

●貞觀八年二月七日神祇官奏言信濃國水内郡三和神部兩神有忿怒可

致兵疫之灾勅國司講師至誠齋潔奉幣並轉讀金剛般若經千卷般若心



經万卷以謝神怒兼厭兵疫云

按水内郡三和村あり神部いふ詳多し或神代村是乎

倭名鈔水内郡 郷名八

芋井 伊曾井 善光寺即是 見縁起文

大田 未詳東鑑 大田庄

芥田 世無多今 千田作

尾張 波利倍 存

大嶋 未詳或云今 属高井郡

古野 布無赤 今布野作

赤生 安加布廢 或赤沼乎

中嶋 宗加之末 方廢村存

●芋井郷善光寺天智天皇三年甲子草創と云

本堂

向南北二十九間二尺余 東西十七間高九丈八尺云

四號

定額山善光寺南命山無量寺 不捨山淨土寺北空山雲上寺

今天台大勸進淨土本願寺共四十八坊 清僧三十一坊 妻帶十五坊

領千石

●尾張部へ姓より彦八井耳命の後より古野郷名へ布留宿禰の姓に由る

多し此處地名津野の津地内野の宇邊郡淺野の朝野の姓に由る

地名の野の字の言助あり例多し又東鑑に載す市村庄芋川庄小河庄

按當郡竹生の名小河 國と称は是れ也

若月庄

或若槻作其地未詳按伊豆守源賴隆信濃國一位一若月と号賴隆へ源家七男隆興守義隆子也其孫若月押田多胡と云

按今の田子村のともや

弘瀬小市等の地名皆本郡あり

●野史曰推古帝十五年大仁鳥臣往東國

按大仁鳥姓鞍作司馬達等孫多須 素子也子之巧の比國史に云

野至科野治水内海至上毛治利根海乃割戸河瀧磐

按下總 國乎

入雁越開栗柘路

及上色路

按今新中越後境川の上にあけろ山 云いりやと怪まおはしんへ

今按水内の北郡今於大池七八あり野

尾海南水二十余所中辨天祠を建

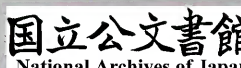
天文年中よりこの所 此湖水の东南にあり

又古ゆ須波系宇治

等の地名ありと古水多し中ちれり是いり官使禹貢のいさほ

れはふくかふるまるといふに 皇者神はせと赤釣のくり田

為と給くり大王者神はせと水ものすくくはぬまと給くり





ついで又いふも此二の草昧の時と云ふにあり

●飯繩山

貝原氏云唯祇尼天を多くと著聞集にいとる知足院殿に原守事傳く  
大権坊といふ勅演の僧よふまにの法を祈らせしころは後中に瓶の生尾  
をゆゑ又本記に妙香侍者外法 夫の山の麓に何去といふ村あり按西行  
成就ふといふ教ひをいふや

の尋にこの山のやうすさふひありあけとのあつりかとのいれらび

以初よりいふ地名もや

或人の按よも岡戸のあつりや戸を在りて昔にありて  
戸かへんよらとて退去を志りて老よありひをさす  
と實に教くるといふを仰く地かれと  
かく名つけしと云わらん

●續日本紀神護景雲二年水内郡刑部知磨友干情篤苦樂共之

以下恐 同郡 關文

人倉橋部廣人出私楯六万束償百姓之負稍免其田租終身云 按尚郡大倉上倉

等を始として及山南小倉の地名多し由疑へ夫の倉橋部よつる名にや ●寶

龜三年正月水内郡人女孀外從五位下金刺舎人若嶋等八人賜連姓云

按水内村の本郡草創の地名以時楯以部稱しとあり也

●ついでりふ本郡の地名大田吉田石村牟礼柏原村山長井温井荒城等とあり

ありて今の大古間小こまの柏原とて富竹止美境は合部大坪の部保姓

今の法守の守保の姓なりと云ふ又三才の地名なりとあり三歳祝の姓なり

冒太多根 今此越の古志竹生の高生藤原の城智なりとあり 鬼無里の著楯

子命後 里の訓の形ひまは梓葉をいふ平の若るなりと云ふ 志垣石かきの子

俗名よ 静間村への下の地と云ふなり

高井乃山

名寄 そのゆゑにいふなりし志のゆゑに井れ山の雲乃と云ふなり 衣笠内大長

按さ井那よる井那村あり富郡の開の地名に後よ郡の名よあり







とてりしと云

按言井谷田中此湯のまよ佐所あり此はよりの二僧の養あり又安曇郡大町の心匠此も二僧の養あり其地りれり

倭名鈔高井郡 郷名五

穂科 保之素 小内 乎宇素 廢

稻向 以素無木 日野 比無乃 神戸 村存

●穂科の穂は高き義は保神皇名ハ借字之此地ハ昔ヨ四ノ不ト又由記書の靈場なりありりとのく系體文治三年二月二品遊于三浦介義澄亭聽那曲時保神宿遊女長爲新在鎌倉今日召彼遊君有容貌且絶舞踏詠哥云

●小内郷其地未詳或小内ノウチと訓點を加ふりのありはく更級ノウチ小谷

の條よりかく其地勢山の畝ノキのふれり不ふへ一内ハ昔の借字あり小畝の義と見えたり或今の東江部西江部のまよりなり●稲向イナギ即今按米持村米子村あり硫黄名産東鑑ハ米用ハ此のふむきのまよの通あり

●日野廢按今の日勝村あり一いハ烽火を置ヒクキ此多る地名ありへは按日本紀孝徳天皇三年造淳足柵置柵戸ヌタリノキヲキノヲ按沼垂磐舟越後郡名 同四

年治磐舟柵以備蝦夷遂選越与信濃之民始置柵戸ニ云又齊明紀北越の蝦夷エミシハ陸奥の蝦夷柵養津刈等の蝦夷と見えあり蝦夷ハ固名ハクハ人の種也と見え

續日本紀文武帝大寶二年十二月令越後國修理石舩柵カキ云元明紀白和銅二年三月陸奥越後二國蝦夷野心シ離馴ハク屢害良民於是遣使徵發遠江駿河甲斐信濃上野越前越中等國以左大弁正四位下巨勢朝臣磨爲陸奥鎮東將軍



民部大輔正五位下佐伯宿禰石湯為征越後蝦夷將軍内藏頭從五位下紀朝臣諸人為副將軍出自兩道征伐云同七月令諸國運送兵器於出羽柵又令越前越中越後佐渡四國船三百艘送于征狄所其餘征蝦夷事畧之越後は隣地して常は備わりとて也●神戸郷ハ其邊の神封の地也  
 一古菅ハ神樂ノ天神古菅と云ふ名あり一井上と号す  
 邪の氏族之源於信之男乙葉三郎の嫡滿實信濃に任し井上と号す  
 孫時田桑洞小坂佳田又兼持芦田高梨須田佐久間安本田等あり●高井郡温泉七野沢 田中 波湯 角間湯 河原湯 仙仁湯 山田湯  
 ●按夜間瀬大郷屬邑十二ヤマセやせと云ふあり方言と云ふあり  
 いの小谷と平宇素と別いの海守三代實録曰貞觀二年信濃國正五位上

馬背神授從五位下云同七年馬背神進從四位下同九年馬背神進從三位と又いりやも位階のすゝめ神の官社に於らるるいり今按馬背ハ夜馬背といふなり

●式の笠原牧ハ伊奈郡あり東澄の笠原牧南條 北條言井郡あり一又云東條庄狩田郷ハ旧主式部太輔繁雅ありあり今唯上條西條中条あり凡庄といふ中代は出て官家の私田といふ上代はいり

●元暦元年尾藤太知宣賦信濃國中野御牧といふり中野笠原等にも屬しりり牧地ありあり  
 ●ついでいりり井郡の地名墨坂越智高志野井上坂田大養笠原枝野中野狩田等ハ姓あり一吉村ハ善世ハ草間ハ平郡仁礼ハ大仁の姓仙仁ハ千の姓あり

和里各典類 卷之十一







一重山

おとやまらふとものそと月うこかしくら味くまゆらん 大伴家持

世よ一重山信濃とん或はうらとよ川奇なり又へり按万葉卷四在久通

京思留寧樂宅坂上大嬢大伴家持一隔山重成物平月夜好見云是山城相樂

郡以ての奇之故夫木集山城或大和

蜂の羽のうとれ衣乃むく人のま紫涼しきゆのいろくふ 家隆

ゆり脚ハをもちす一を山にゆらぐはひをこせ吾背よみ人あは

按万葉の奇ハ壬二集より川後の奇ハ万葉古より天平十五年八月十六

讚久通京作哥高丘河内連と見えり河内連出 又哥枕名寄信濃郡云一重

山當國維有は名處詠之是處に東史とてり川奇

名考  
むらもほ名のこもりよりおとく山をよめさるる旅のあしり中勢のみこ

とふの色ハ衣くさ一を山にゆらぐ電かこむれとよみ人あは

今万葉せりて山城の一重山とまら勿論し名考より一重山信濃とす

いづくはゆらん或云一隔山名不よりゆらぐおとくの山より万葉十

重山百を山五百を山は舟車のをゆらぐおとくの敷ひはかきあはる

●久通京ハを武帝の新都より續日本紀天平十二 戊午 是日右大臣橘宿禰

諸兄在前而發經畧山城国相樂郡恭仁郷以擬遷都故也丁卯皇帝在前幸恭仁

宮始作京都矣太上天皇皇在後而至按薩原泉河は也より 今加茂と本津

のぬ郷のぬまかしの山つらねりて界大和通望似長堤いとゆる山城或 大和とまらむ又衣

よりハ一を山城城矣代の山つらねりて界大和通望似長堤











今按浦邸古蹟 今の岩掛 遠名あり 山を隔て出浦迄 別所院内 湯泉地 南子内ひり地名あり

内邑八谷の熱名天文軍記信州内山城武田 信玄小諸を登て砂原峠を越内山入即是 古語 浦地名野とい

ひ樹といひ一處とされたり 再按倭名鈔更級郡御名村上の地尺寸録浦邸の西北村松脚是平村上氏祖信儀死流の地出

浦邸支流より今五明力石の巻岩橋より入る積目置ふと筑前郡入村上小縣郡一属一良

ハ云抄信儀云

夫木 尋もやんの手傳はくすとも人成恨の至まのかうひ路 後三位為實

其地未詳中事のついでに名にあらせり

塩田川 名寄三木の 史本未効

名寄 名多り此志月との川子舟よりきてこのりか存せり 中勢親王

塩田川 信の掾津同名と云今按關氏掾津志曰武庫山衆水會湯山至于塩

田曰塩田川古人所題詠蓋此乎 云 掾州河急有馬去庫三郡の水を引て塩

田とて生流よ會て流よ入今も舟をほつ魚 又小縣郡塩田の地理をうに

多川の細さ流あるの之水源を流いひり 類詠の地とらひい

按寒川の池名倭名抄讚岐寒河郡を始して流まあり 是山水よ出る名あり後世或は高字のてかん川と唱は流あり

那須乃御湯

信流 類衆 なるなるのゆもらひひささく人さくさるやひるく ま

按那須湯未詳今内村谷は温泉三座高梨村 カ 對てうり ま 梨の湯湯是

倭名鈔備前縣梨郡伊波赤須と訓あるの類ひあり 按梨成生楢等の字皆傍字平の字のなをあらすとい

●ついでりり高梨の地 古国府流下より流るみさ山 北方たぐり雪の水と西山の

水乃高梨のときりり流磨の記とりりりの上世さりの湖は白竜王すあり



とよ此説も又誣とてい地上古湖水の意を記し記する名も一又大神宮  
あり傍例を按蛇龍難陀跋都陀等真龍也と註していり此山が海らのすめ  
る名く神代卷高麗タカノカミ此云於万葉卷二吾聞之於可美爾言而令落ニロカ常陸志風土  
記とて曰び新治郡馭家子大蛇多オロキサハすめりりりて大神となつて又豊  
後風土記にも同記あり

●小縣郡温泉掛湯一座靈泉寺湯一座平井村靈泉寺派陀堂とのありと  
る多く之  
正堂上梁文曰隱岐守平朝臣田澤湯内湯山人別所湯大湯玄井印内湯大  
繁長建正和二年十二月云未詳湯二座  
湯古我湯院内安樂寺四層八稜の塔あり思倭りてゆゑありひりさ進物也傳  
石湯三座  
惟茂建しり未詳或ハ北條武藏守義政の餘澤あり也  
年落繁信州に家居す世号信又野舎のわに小倉湯あり温泉凡六  
田原墳墓別ニありと云

●再按小縣地名竹志和田長背大宅佐佐為比姓あり今の秋和ハ商長姓也  
根津ハ根此夏目田ハ夏見姓殿戸ハ殿本姓殿の地名よぶ川の氷原よの池ハ余の姓カネ  
見文徳見文徳深屋ハ拍深部よむる下東国通歴高懸大武白鳥白鳥也姓あり  
實録實録  
靈神白鳥子化はかといハ同日此古夏あり又盛妻記白鳥河原といり又  
日本後紀曰弘仁二年五月信濃國秋白鳥按白鳥漢名天鷲名天鷲何うけり世ハ祥瑞ニ分表  
ありとてハハの半に出る地名也●万葉卷廿天平勝宝七年二月國造  
小縣郡他田舎人大鴨切ヲカタク衣子ニをにりつさありあきとあきてとき物也意  
母ありとてともあり貞觀四年派よ梳ハ願外正八位下他田舎人孫雄授借  
外後五位下といハ大島後分下  
知俱麻河伯名寄小縣郡とすハ式の誤信と據あり  
今とてハ佐久郡にあり



万十四国哥

信濃宗流知具麻能河伯能左射禮思母伎彌之布美氏婆多麻等比呂波牟

新流古今

君代とちくまの川のさるれ石の苦むす岩とありつくすよて

式子内親王

雪玉

氷のうへは降もつても千濃河さるや峰の君もあまもむ 道遠院

千濃河、龍ノ郡より中代龍ノの傍字よ終て 常陸同冬ノ使あり今千曲も傍も濃よ因 佐久郡金峰山の陰に坐す

このうへは鱒を浮くへー又東ニワ峰より出る梓川ありいづの上よ今も

三ツ峯 東 龍ノ川の傍水也 佐久小郡を聖と川中崎郡の堺をゆく又犀河ハ約々坐す出て

神奈川の水流

龍ノ安曇更級水内ノ堺を經てちくま川は尾合すてちくま川といふ

城の新澤よておのの川ともいふ

山歌

ちくま河より水とすこにちくま消ていく此峰のちくま

順徳院

巖を巖て入甲斐と界ありと一説あり赤洋多ハテ巖有てさす所あり

似たり

●扶桑略記曰 光孝 天皇 仁和三年七月廿日信濃國大山類崩山河溢流 六郡城廬拂地

漂流牛馬男女流死成丘云 冬巳十九 云 是くハ寛保二年 戌八月一日千濃河洪水は溺れ死

の敷子人此水災六郡 伊奈 治方 龍ノ 仁和申の池の如く 畧記の記もちくま

川あり一六郡より一川ありはなる

●千濃河の上川端下に盤古の社と

りあり一高天原とハ廣大の原あり 大略ニ 十里 神軍かとりん中を祝家の原ん

といしりのりの子傳ふ又相本宿子宮社の祈祝部平官丁かとの地あり按部

ハ諏方の城あり類ハ伊勢津彦の神乃身をよせらけり 地もや神代の時伊勢ハ

後田彦命のありまの園あり 是後ハ伊勢津彦春日部の二社園をうらひ

すあり 其地今 名戸是く 神武帝東征の日天日別命とて登兵欲殺之二神畏伏て



國を尋て春日部八河内云々今高安郡教興寺村天照大神高座神社と号即是なり伊勢津彦八太の云々

て信濃よ去仙覚伊勢志土記説を引て神代伊勢の記あり是正説あり一説諏方明神伊勢より信濃よ

うつりゆく時風伯の神よ来て飛降風祝部説其神ハ詔方江之守云々

後世おれりの説より詔方ハ伊勢津彦ありかと云説見へあり●金峰

山彦ヤマト山丈あり人を呼て領ユミの如イハ云イハ二音三音連てよ時松人

ありて迎りとりよ又大人礼繁マツのあり本石よ去りて

して人と目送す又山姥の咄とて長之尺許藤フジとて本皮をあら

つりのありと少按深山の老獺ニコウの教あり下ノ飛浮の事とて

より老犬ありとて

いづる山

嵯中抄 文正伝のまゝに云々  
あつりて方のうま事やいづる山いづる山これおきありん

六帖 一江いづる山を云  
こゝれていづる山を云ぬれと云々かゝりありてらむ

身枕名寄云いづる山信の伊倉山正字未詳と云より按生藏乃姓イクラ

紀よ見より是亦云云ありん今居倉村あり是より云と云此を詔所

平の地名山中は臨幸坂ありと云ありは流人の詔ありて信より神

龜元年詔方國伊勢中流定祀所とて詔部との城はあれを村タケノコ

詔所の地名を云後日ハ紀寶龜三年二月先是從五位上掃守王男小月王賜姓

勝間田流信濃國至是復屬藉ツク云按勝間村の王城ちくま川よ云む銀八小

月王配流の地ありとあり●故家雜記云天德四年庚申の秋村上天皇○

○皇子去日村よ去りて宮を建て住より其後一條院正曆三年



勝岡の王城は移り同四年岩村回王城は移り  
比田井内裏 窪の窟を俗  
はるよりと傳ふ又此 ありしもの記本詳としともむりしるはるありし  
暫記して後の考を待とのし

望月御牧 馬城ハ馬飼あり

拾遺 紀貫之の軍の所水子影入て赤みわ引りら月の約

全 素性法師

後拾遺 惠慶法師

金葉 源仲政

新古今 定 家

按文武天皇即位四年令諸國定牧地放牛馬上それより後世に至りて毎月勅

使駒牽あり天皇御紫宸殿闔覽テ信濃貢馬ヲと云へり貞觀七年十二月制サタム

信濃國勅使牧野馬元八月廿九日貢之今定十五日モキノヒ云是より牧子令月の

名あり江家次第曰信乃御馬本八月十五也而依朱雀院御國忌改用十六日云

延喜馬寮式牧 信濃國

山鹿牧 塩原牧 岡屋牧 宮處牧

殖原牧 大野牧 平井互牧 笠原牧

高位牧 新治牧 大室牧 猪鹿牧

萩倉牧 塩野牧 長倉牧 望月牧

右諸牧駒者毎年九月十日國司與牧監若別當人等臨牧檢印共署其帳 信乃甲斐上野三 國任牧監武藏

別當 簡繫齒四歳已上可堪用者調良明年八月附牧監等貢上若不中貢者便充傳



馬若省賣却混合正稅其貢上馬路次之國各充秣藁並牽夫遞送前所其國解者主當察付外記進大臣經奏聞分給兩寮關定其品云

按信濃十六牧貢馬八十疋三月廿疋 甲斐三牧貢馬六十疋武藏四牧貢馬五十疋

足上野九牧貢馬五十疋四ヶ國合て式百十七疋年貢の御馬と申又所貢

繫飼のる牛ありを江波河お換武藏上野下野常陸上野下野周防長

門伊豫後波岐十二ヶ所と云く

●牧地今按山麻堀原墨登宮不登原後方郡あり

宮處公系今 大那牧伊奈郡あり平出殖系流下郡あり

大室言井郡あり包月長倉垣野新作備麻萩倉六牧八佐久郡あり

●貢牛貢蘇あり伊奈子牛牧大室子牛崎佐久郡牛六ふとの地名是り出

民部省下諸國貢蘇條曰陶隱居本草註曰酥牛羊乳所為也酥音与蘇同信濃國貢蘇十三壺五口各大一升八口各小一升其取得乳者肥牛月大口瘦牛減半作蘇之法乳大一斗更得蘇大一升但飼秣者頭日

別四把上下畧

東鑑文治二年八月所謂左馬寮領

笠原御牧見式 宮處 平井互式 岡屋式

平野木詳 小野牧 大塩牧 塩原式

南内 北内 大野牧 大室牧

常盤牧 高井野牧式 笠原牧南條 同北条

吉田牧 萩金井 新張牧式 望月牧式

塩河牧 菱野 長倉牧式 塩野牧式







牧名用萩宇萩倉是也云云あれ必ハ源氏傳字の誤と云ふべし

今從菅倉の地ありとて正しとす

七葉の地名ありて菅倉牧北より金倉牧東より或云約也多々利牧也

多々良と云ふて此地ありとて以上二牧の約菴の地あり

牧村約菴地なる所の地名又約形神祠今あり

り盛衰記る郡吉祥は作らるる方言人の姓をい中一ひかありて馬部丁

浅間嶽

古今 雲々いぬあまの山乃あまのや人のあまをえてと云ふ

信濃のつらまのあけもと云ふれと云ふの嶽のつらま

つらまのあけもと云ふれと云ふの嶽のつらま

金葉 今今 源俊頼

天武紀曰白鳳十四年三月信濃國灰降草木枯云今按あれ必ハ此の

の災と云けとるへ一頂の大坑はひは嶽之のつらま流黄の氣あり

三百 坑中より流黄なる時地火突發一火石なりとて砂石を降

て林麻とやく其音數百里をすゆ故に此のつらま元として四時す

ま一費之ぬの嶽のつらま中船破あまのつらまのつらまのつらま

いく千載震動をと焦し山のすももあまのつらまのつらま

前説古史記知波夜夫流知ハ伊知を畧との伊知ハ伊都ハ日本紀稜威ハ伊都

波夜ハ伊都ハ疾也夫流ハ伊都ハ伊都ハ伊都ハ伊都ハ伊都ハ伊都ハ伊都

人望不盡山牙のつらまのつらまの時神左備てさく貴さすのつらまのつらま







後百餘年八國のさかたけりけくゆるす沢路重有せめられし路の

人もささおほす 或はわさ六火の梵僧也 されとまき 眺 富士は遠く何じ

のもけり明の申叔が海東諸國記に山は時白雪をつむとく不盡

のち根よまきとく 今昔月のおまきおれとまきの後百餘日霜

匠て雪のけり これ如く又中秋より落さく或はお子く来て毛依は

刺故 耕の日せぬけり借せむいハき氣強く満釜凍破り今ハ

かろ中引 これハ秦の代よまき強く漢よまて暖けりと苛政ハ虎より

もけり今報有順化よあか 今昔年の意熨もそれよまきとく

浅向の山陽 黄は流し水けりを河川とも水係血也と云又焦石せけり流して水を吸

ふ又 山よ上より松をせけり老樹五云ふみくは壯觀也若水翁曰衡嶽志云繁葉如刺栢霜後

盡脱故名落葉松落葉松春生葉七刺或五刺如括成細小而軟淡綠色可愛信州駿州有之故

俗名富士松京師移種之呼曰姫子松多難長云云今後乃山の唐松もれの如く里より一植て云

母きりて松 松長五六寸以上の其實醜貝原氏云おれ老朝鮮

につく ●浅間山陽生紫草烏佳品

附 科山 非名處

佐久那蓼科 ハハのあけりよまきたよりて

水のゆき のあられもさてささくささくぬまをさて山よ入いりちの

本 おんといふを絶て 背向 ソカヒ 是より作をまきぬめす

峰 あり磐石を踏よ 登 テ 面 歩 姫子 といふ松の 延 て 礎 は

つ て 雲 霧 の ふ 日 映 され て 夜 ハ みる に して て 神 彩 多 く なる に

三 カ の お け り 今 も 頂 は 土 切 磐 石 ハ 尾 を 鋪 ぎ ぬ 松 ハ 席 を ち り せ り

多 あり 其 中 に 栖 び ぬ ち り ぬ め せ い ち き 雲 を 踏 て 蓼 科 の 神 祠 を

り ぬ ち り 又 口 崎 は 峰 は 白 雪 け れ 飯 盛 の 山 とも い へ り

甲賀三郎巖 穴獅子岩石



井無音川等  
の地名あり

蓼科神祠 毎六月八日十五日潔齋而登  
神祠小諸牧野侯所建

三代實録曰陽成天皇元慶二年七月十六日信濃國正六位上蓼科神授從五位下

●磐井 石間斜入六七尺水數斛と登る一棧是高山雲霧の澤  
石垣は湛る不あり故上旬水多し下旬水少し

●蓼科山は拙むまハ世よ學する鶴あり画圖は少しの差あり戴冠之尾  
も長うささの雄のわらちをむふ似て高二尺許黒色は白斑あり鳥鶴の如

し丹頂の肉けり唯めるとの黄嶋鶴は似てひのうら黒く白斑けり高  
穴は拙く松の羽舞をまむとけり

後鳥羽院御集 去々山乃松のあけはかりひてやまにすめらひのまろりぬ

或ハ此山お半鶴鳴ありけりハ君洗ひて一とせみお丹の末に登山  
すりし所は一松を削して五十餘丁を登るは日暮ありてふ人夢死  
ふらけのま六七尺多りけりハ君は相さぬ丸くまを就きん  
半とせりて板や東西よまこられ坐をかき一杖をぬりて悲し  
とけり甚まけりしてまもる外ハ三ハハ押えとけり石中ハ逃入  
る雛一ツとけり鴨雄石間よりけりて妙ふと呼其声虫の鳴りぬ  
出栖の鳥人よ鶴てまをむさハ鶴鳴ハ安流あり  
丹頂ハ  
そのま  
●又此山は突然けり夏月雷雨の起る時小秋石穂よりけりこれ飛てま入  
る半鶴の如し須臾ハ雨を傾かたりけりハ暴雨の後山



死して流いつる小款二あり大さ小大の如くはく灰色之頭長くは  
半尾一尾ハ狐の如くあすきたに利尻島の如く一按露霽の地樹木  
凡の根あるとの毛之土佐の國海を夕之起へて是上よ小款あり鳥  
鏡りてしらほてわらけ汁とよまるとの又是のへ一を年六月十日  
暴雨は農丈二人脚外と迎へしに電光一発いふら耳のたれ  
き二人の首はたるとのりりたれは背は死つさ肩と踏で勝らん  
とすさたれは種者なり一をかりてこの款と大地はねつけ押て  
ゆらり村人雷とてありとてして是の事は如く其款の状  
たよりありのにかもさうは色は國がその村小てさうくさう人  
のたよりし是さうにうたさる半にあり

明和七年七月伊予郡野村  
雷款のたより状の如く

蕎麥生

元正紀養老六年七月宜令天下國司勸課百姓種樹晚禾蕎麥及大小麥藏置儲

積以備年荒云或續日本後紀仁明帝承和録云引て本朝蕎麥の始とすハ兼あり

今佐久那河上と佳産といふ又蕎麥の地名はくよまはあれ蕎麥重よま  
たり

●著聞集云道命河内梨液あり一はうさうはゆまうどの物とてせう  
多を見てあはれ何れをその向れかこよあててゆとほむさ  
是ありといふをせうといふ

切こえてさうたすぬとまむさあつさぬまあち社すれ  
桜よとをまるとゆと海一とて今も毎郡山中の人蕎麥一本を



燒餅ニツとして腰向よりなり

●重ていひ佐久那の地名 牟漏平原守山竹田清川生藏等ハ姓勿々ノ諸

牟漏り牟礼牟婁村室子作の皆通用岩村回石村より一 磐石岩通用 大

和園十市部磐余同訓あり 古史記伊波礼と書村ハ 繼體紀子都奴安播符以歟例

能伊開能云 万葉卷三角障経石村毛不過泊瀬山云 是ハ薩這石ノ半にて

岩のしり云々 角網葎相通てつとを付分ともつぬとも 伴野 或伴或トモ

あり 野ハ語の助て地名ハ例多ク 磯系神傳和天皇御講と 吹やありしの大井とす

オヨシと云ふ大伴と云ふは流ナ御名のトナリ 田口の地名按推古天皇御代武内宿禰

元祖一遍上人トモて踊躍の念佛と云ひ 野ハ金堂寺ハ即初開の地号 紫雲堂道場

後蝙蝠臣家大和國田口村仍號田口臣と云ふ始として法園は南口姓なり

阿刀部跡見部の畧也、天子の御狩は鷹飼部大飼部射部跡見部

山守部野守部より周禮よともり迹人迹之言跡知禽獸處と云ふ

○本間ハ謙間也 爾雅注曰後味猿 神武天皇登腋上喙間丘廻望國狀云

今大和國本間村是也 ○與良又依の地名同訓あり 以上地名 万葉十四

のまげかた云棒弓よるとり河と雍良の地名よかけたり 今奈良の依連村の上

又依路の地名諸郡よりつとれ坂上之踏本にあり是ハ攀よづの義あり也

○大井 小田井根井 漢小市井と云和ノ井堰と云義よりの山下回乃田井小

比田井の類多 高井郡 條よりの比田井上野より祢河の如し 川ある如し ○塩名田

九塩地 傍例と按、塩ハ水漬也名田稻也灘の義よりの武烈記の身よ

名皆同 之哀世能難鳴理鳴弥黎磨云 ○糠地名ぬハ借字 額正字ノ禮











科野名典勢 卷之下編

鎌倉被誅城陸奥守依逆心也後康永中伴野出羽守長房より相渡り大

井寺郎朝光長清大戴局の家跡代任干此嫡子光長松原社頭鐘曰佐久郡大井庄落合村新善光寺寛元二年

七月大堰那源朝臣光長即是行光光長三男行時行光二男其子甲斐守光榮大井惣領職と号●大室

時光住老長嫡子子孫相續以大井光長七子より二男恭光長土呂住後領内三男

行光家督四男行氏耳取任以五男宗光森山任配流佐渡六郎光盛平原住

次僧光信●相木八依田氏代々據干此戦國ノ最初佐久四統と稱す所謂大井

米持伴野阿江本是也一記云延徳元年甲斐敵將佐久郡乱六月五日焼討

岩尾城世云時城主大井彈正代而立實武田彈正者也或先主又道漂泊而卒高野山藏記

同時落合慈壽寺炎焼傳云茲年甲州勢掠取鐘同日敵渡倉瀬直責菅田為

棟梁大井伊賀守迎戰大破甲兵此日菅田討死云一主殿一作一倉見云城米持庄司作

租稅 延喜式載信濃國正稅公廨各稻三十五萬束國分寺料四万束東福寺料四

万束文殊會料一千束修理池溝料三万束救急料八万束俘囚料三千束凡八十九万束○拾芥

抄云弘仁式云上田一段地子十束中田一段八束下田一段六束年料別納租穀一萬二千斛

○三代實録仁和元年二月聽信濃國以乘田三十町當國屬佃隨官符到五位祿季祿衣服等料云

但其地子任例進納太政官厨永以為例彼國官自此始焉 貢御贄 梨子三荷納八籠籠 大棗一

荷納八籠籠 楚割鮭一荷納九籠籠 例貢十月進之梨子三

荷如前 大棗一荷如前 例貢十一月進之三代實録曰仁和三年信濃國例貢梨子大棗吳桃子

議定例貢每年十月別 貢酥十三壺雜別貢梨子大棗等貢獻之期元不立制太政官

為期立為恒例云云 諸國分為六番一番八國丑未年二番八國寅申年三番八國卯

○酥牛羊乳成酪 酪成酥酥成醍醐 古今物名 何らさかきあけさかつかせりてはひるこを搾ぬりのう

ま本集 時子あひて秋をもほくぬかひかあひてすゑの枝をくんとて 知 家

源隆草 其山よりけりての類をうけてみまきののりてはひるこを搾ぬりのう 小 人

○古今集物名の例貢のものにてさかきあけさかつかせりてはひるこを搾ぬりのう 小 人







和里各身... 續

三斗八升 今高井郡米子 熊膽丸具 今諸郡出水内山中尤多或云信濃熊膽氣味功能會津越前又劣唯涅色而黑漆の如あり一種ありのり

鹿茸十具 枸杞廿斤 杏仁六斗 大棗大一斛 按今産藥數十種ありこれと典藥式乃附子の如きは不害すくわん或は天朝

盛りし時中華より藥物熟識のものと召来し此を巡視せし方物を貢進せし延喜式貢藥を見つるは時産人漫處凡十州皆伊勢甲斐陸奥若狭越前丹波美作伊豫太宰府等あり今

倭名類聚鈔曰田三万九百八町八段百四十步正公各三十五萬束本稻八千九百五十束雜稻十九万五千束 見稻簿曰米六十壹万五千八百十八石七斗三升

七合五勺 按孝德天皇四年詔りて田段毎に租稻三束三把中畧田之調絹絶綿並隨御土所出田一町二絹二丈絶二天布二尺別叔戸別之調一戸貫布一丈二尺以五十戸元仕丁一人之粮一戸庸布一丈二尺庸米五斗上下畧本朝ふり調くし庸とふり或云按唐制有田則有租有租有家則有調有身則有庸租出穀庸出絹調出繒續布麻云

信濃地名考 大尾

下卷補遺

●戸隠山の西南鬼無里村あり土倉村許ありふもとを越て戸隠山と云ふは是也山

●さあとの南は大塔といふ処あり 今大道大塔記といふは應永七年小笠原長秀

●小嶋井川館政長孫長基子 信濃守にて下向の北河原郡より佐久郡へ入

●要旨は楢巻て合致し及小笠原一郡味方として一日甲斐の跡ひよ長秀は討負水内郡大塔の古要害に逃入志々と兵糧尽きて上下の飢渴甚余日に及小笠原の勇士三百余人悉討死にけ時佐久郡耳取の主大井治部少輔光矩和議して將軍故以加て長秀は舎弟政康と濃州土岐より呼出でて惣職と爲り了上方に退去す又云



日向信濃の名所とて長秀は信入下りし思ひのみに事起りて麓

城のうらまひを窺阮言浪に流るり娘捨山の詠此時はありと記せり

娘捨山 叶巻集 けしんかきあわさるるあはれを娘捨山の月よかきとん

九月十三日 娘捨山と云 ありし娘捨山と云はれをあはれを海にまわす月よか

按應永中頃阿存生非あり 頼阿藤系道長公孫師實公之後俗名貞宗出家号茶号後号以阿住者部類云俗名貞宗二階堂下野守光貞子

傳云貞治二年頃七十餘葉撰政良基公よ會して愚問賢注と題して正風

の竜鑑とて後双林寺よて寂す千四葉 東野州開書云 忌日三月十一日 又迎陽文集とて抑茶

花院平生棲息之閑地終身安心之幽莊也 頼阿五 句頼文 應安五年四月日弟子法

印大和尚位少僧都 経賢 敏白と云ふれは日向應安中遷化歎か

●若光ちと室井の向ふと風越山あり 見干 中巻 ●五束村あり イッカ 按五束と訓

名社 イッカ 地名巖の義 伊豆本 又同 兼仁紀小天照太神鎮座磯城巖檀之本 モトニ

古夏記小伊豆加斯賀母登 イッカ 万葉に五可新何本 イハヒキ 是神の齋本の義之

此地名五束 イッカ 和名山城國羽束の御と云ふれは イッカ 例あれんあ

●高御座山條 按神武紀大和國菟田高倉山女坂男坂墨坂等 莫見く神名

式墨坂神社と載り高井郡に須坂村高倉山あり此地名は イッカ あり半故あり

世は名外集ありとのさみ イッカ 信濃と云ふは イッカ の名目と誤あると云ふ

●高井郡日野條 按日本紀天知天皇三年於對馬嶋壹岐嶋筑紫國等置防與

烽 イッカ 續紀和銅五年廢河内國高安烽始置高見烽及大倭國春日烽

以通平城 イッカ 後紀延曆十五年山城大和兩國相共便取置彼烽 イッカ

の イッカ 御代のけり 矢西の國く是よりひて東の國く







良親王云親王嵯峨天皇第二御子也系書云大江廣元嘉祿元年以

其子親廣其子佐房其子上田太郎佐泰舍弟上田弥次郎長廣等弘安年中人

其子孫各上田小住以國分寺講讀師諸國分寺金光明寺六佛と建

各造七重塔一區寫金字金光明經一部講師と置て一國僧尼の司と以

延曆寺並諸大寺三綱任之三綱上座寺主都維那寄領四千町續日本紀よるより

玄菜曾式云凡延曆寺三綱一任之後任諸國講讀師其上座寺主任

講師都維那任讀師

●佐久郡岩村田條日本紀神武帝磐余の地名瘞て先儒考と淺く今按

磐余若櫻宮古跡大和國十市郡池内村池内所謂市師池是其北石原田是即磐

余玉穗宮の跡也石村通て石原と云れり石村も通て岩村也

助て後世例多し●安原村洲家宗安娘寺永亨年中足利成氏

生長の地管領記よるより任持智鑑禪師の弟子大井鐵前守枝光の子後改持光

永壽王の母と兄弟と云女養寺領三百貫文佛宇百二十三末山貳百之十余といふ今瘞せり

●貢御贄條江家次第東宮御元服條下召菓子鮮物國々信濃國貢之

●主計式貢絲續紀娘老元年五月令上総信濃二國始貢絶調フキヌヅ●貫布

江次第始て細美より●高布和名多途曰唐式白絲布テシリンヌ俗用手作布三寸と

云れり多ッ少ク迄布也●搦子四合倭名鈔曰唐韻云搦音年雷同字亦

本朝式云搦子酒器也江次第二五旬儀厨御贄の注よる持御贄

四棒入搦子又内豎三人各持搦子有蓋と云る

新編和名考

十市郡其九

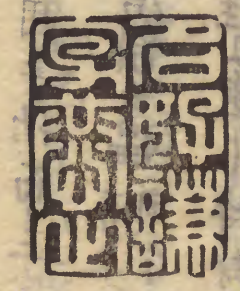
口



科里各典勢  
卷之十卷終

信州岩村田

吉澤鷄山藏板



安永二年 癸巳春

江戸室町三丁目

江東書林 須原屋市兵衛梓

寺 弘化四年丁未孟夏末 共三冊

鈴木義氏



